人文会ニュース

業務用

●特集　大学生協書籍部

書店から見た最近の大学生協書籍部
……高知・金高堂　吉村浩二　1

大学生協書籍事業の課題
……全国大学生活協同組合連合会　金子久臣　4

わが生協書籍部について
……慶応義塾大学大学院経済学研究科　井上弘基　14
……早稲田大学法学部　岩東完治　17

〈人文書講座 Ⅳ〉
園芸術から森林学まで ……有斐閣　平川幸雄　19
——(緑の危機)を考える——

'84. 3　40

大月書店

●土と緑とともにある暮らしの一年

大地のカレンダー

太田愛人著 46判カバー・1200円

横浜の郊外で小さな畑をたがやしながら、身辺に息づいている自然とも楽しくつきあい続ける牧師さんが綴った、土と緑とともにある暮らしの一年。

知恵の樹を育てる

是枝英子著

●信州上郷図書館物語

本好きの若者たちが自ら汗を流し、金を喜えて図書館をつくりあげた。埋もれたドラマの中に民衆図書館の原像を探る。46判・1500円

マンガ文化

副田義也 あらゆるジャンルのマンガをとりあげそれらがもつ魅力を明らかにしつつ、現在のマンガ文化を幅広く解説・分析する■定価二五〇〇円

中心の力

美術における構図の研究

アルンハイム／関計夫訳 二つの基本的な空間系の相互作用によって、視覚芸術作品の構造が明らかにされることを実例で示す。■定価三五〇〇円

スーパーマインド

心は脳を超える

ブラウン／橋口英俊、他訳 超常現象や神秘体験をおこす心の不可思議なパワーの秘密の扉を開示した一女性科学者の偉大な試み■定価二八〇〇円

紀伊國屋書店

本　店：東京都新宿区新宿3-17-7
出版部：東京都千代田区五番町12

御茶の水書房

読み書きの社会史

C・チポラ／佐田玄治訳 A5判・一五〇〇円

〔文盲から文明へ〕 通商の状態や都市化の進行と分かちがたい関係を持つ読み書き能力の歴史を、経済史と教育史を織り混ぜながら明らかにし、文明の諸相を探るユニークな書。

市民13660号

M・オークボ画文／前山隆訳 二三〇〇円

戦時強制収容に送りこまれた日系女子画学生の体験した苦難の生活

〒102 東京都千代田区九段北1-8-2/03(265)5746

メディアの快楽

中野　収 広告・都市・ファッション・音楽などを経めぐり、サブ・カルチャーの意味を記号論風に捉える。一九〇〇円〒250

現代のイギリス哲学

G・ワーノック／坂本・宮下訳　ムーア・ウィトゲンシュタイン・オースティン 20世紀哲学の精彩に富んだ起伏を、人と思想に即し、巧みな筆致で描く。一九〇〇円〒250

転換する中国Ⅰ

本によるアプローチ

尾崎・戴・野原・野村編 各分野別に多くの書物の長所短所、注目点を鋭く指摘した良書選択に最適の書。一八〇〇円〒250

朝鮮と日本人

旗田　巍 〈教科書問題〉を契機に、誤った朝鮮観の批判・克服など朝鮮研究の第一人者による基本文献。二七〇〇円〒300

東京文京 後楽2-23 **勁草書房** 振替東京 5-175253

人文会ニュースでは、東北大・東大・早大他の生協書籍部の方々に『読書環境づくりをめざして』というテーマで座談会を実施（34号参照）し、生協現場からの声をお聞きしました。およそ二年を経て、現在の生協書籍部のあり方はどう変化したのか、変貌してゆく読者をどう把んでいくのか。

出版社にとり有力読者である学生、院生、関係者へのアプローチは最大の関心事であり、課題となっています。読書推進の起爆剤としての位置づけにもと願っております。

今号では、その読者との接点である『生協書籍部』を取り上げ、関係者の方々のご意見、方向を伺いました。

高知・金高堂吉村社長からは特別寄稿をいただきました。

ご多用中執筆下さった皆様に厚く御礼申上げます。ありがとうございました。

弘報委員会

書店から見た最近の大学生協書籍部

高知・金高堂　吉村浩二

ひと言で言うならば、大学生協書籍部はいつからこんな本のバーゲンセールの舞台になってしまったのかという思いが強い。店内の目につくポスター類はオール10％値引きや、全集フェア15％～20％値引きのものばかりで、組合員であろうがなかろうがここで買う人は、雑誌、文庫、ベストセラー、専門書を問わず全て10％引きで買える。発足当時の組合員証を提示し、5％相当のクーポンを配っていたしとやかさは完全に無くなり、値引きで

売るというしたたかさのみが強くなっているようである。同じ本を売る立場の者からすれば、この再販の治外法権の特殊環境が引っかかるのである。こうした商法がエスカレートしていくと、本の定価は権威がすたれ、再販は崩壊していくことだろう。定価設定者である版元はこの辺をどう考えているのか知りたいものである。対象者が最高学府で教える者と学ぶ者であるだけに、今後大きな影響力が別の方面から出てくる可能性もある。

都会のマンモス大学は別として、地方の大学の生協書籍部は学生の便宜を第一義として、教科書を主に取り扱う形でスタートしたところが多いと思う。それが序々に拡大され、店づくりをし、専門書の常備を取り揃え、売場を拡げ、研究費による購入や図書館の購入も一手に仕切るシステムが出来上った。これは地理的条件や全国組織ということからも、ごくあたりまえのことかもしれない。

そうした反面、これも当然のことながら大学出入の書店は退却を余儀無くされ、それによって大学教授と学生は社会的刺激を受ける機会の減少につながっているとも言える。これが昨今の人文・社会科学書の不振に関連があると見るのはうがち過ぎであろうか。

以前、大学教授は書店に顔がきいた。プライベートな本の購入はもちろん、研究費での購入、教科書、学生への推薦図書など書店に直接与える利害をはじめ、品揃えや販売のアドヴァイザーとしても書店に大きな影響力があったからである。また、一人の教授が複数の書店に出入りするから、必然的に数多くの書店が自店の能力の範囲でながら人文・社会科学書の充実に努力する結果になっていた。このことは、大学生のみならず一般社会人に対しても人文・社会科学書に接する機会を増やすことになり、お互いの社会的刺激になっていたようである。

大学教授は地方における文化のオピニオンリーダーとしての自負があるはずである。書店に顔がきく、ということは本を通じて有形無形の社会文化的影響力を地域に与えていたと思う。それが生協の隆盛によって、大学という枠の中に入ってしまい、その責務を放棄してしまったとはいえないだろうか。

人文会の特約店一覧表を見ると大学生協の多いのが目につく。現在の業界事情から察すると書店と生協の対比は生協にウェイトがかかっていくように思われる。しか

し、版元、書店、読者はそれぞれの立場から考えて、これでいいのだろうかという疑義は残るはずである。とくに人文・社会科学書が不振といわれる現在、版元はその対策のひとつとして、大学生協と書店に対し政治的配慮と経済的指導を行うべきではないだろうか。読者の立場からみたバランス感覚の必要性が求められているように思える。大学生協と書店の品揃えを検討してみるとそういう気がしてならない。

本を買う場合、その本が研究や勉学に使う目的であっても、娯楽物として買う時でも、ある種の楽しさがなければならないと思う。そのための演出と雰囲気づくりを売る側は創らなくてはならない。大学生協はそれを値引きというもので総括してしまってはいないだろうか。大学で必要な物は生協で間に合ってしまうだけに、それに甘んじて読書の喜こびや選択の楽しさ、外部からの刺激が解らずじまいの学生を作ってしまう恐れは充分にありそうである。「大学を卒業した、さあ本を読もう」などと言われないためにも、読書啓蒙運動の先端としての自負を生協書籍部にもってもらいたい。

昨年、大学生協で売れはじめ書店に拡がっていった本に、吉本隆明、栗本慎一郎『相対幻論』(冬樹社)と、浅田彰『構造と力』(勁草書房)がある。今の出版界からみれば、かなりハードなこうした本が大学生協が火をつけるという現象は大変喜こばしいことといえる。是非こうした形での読書の拡がりと、読者の掘り起しをお互いがやらなければならないと思う。若者の活字離れ、読書時間の減少、それに伴う業界の不振をいわれてから久しいが、いまだに業界あげての読者づくりのための根本的施策はなされていない。全国的組織である大学生協書籍部と日書連が論じ合い、確かな方向への推進を計る時だと思う。

キャンパスから知的読書の発信がなされる、その発信地としての役割を大学生協書籍部はになっている。組織がある故にその波の影響は書店に対し、読者に対し大きいはずである。第二、第三の『構造と力』が出てくることを大いに期待したいところである。

大学生協書籍事業の課題

全国大学生活協同組合連合会　金子久臣

大学生協は読者をどう捉えるか

書店というサイドにたつとき、読者の書籍購入を総合的にどう捉えるかということは大変重要な課題であると思う。大学生協にとって読者層（組合員）が学生・院生・教員・大学職員に限定されていることと、店舗自体が平均で二〇坪強（最大でも一五〇坪）と決して十分な売場面積ではないことから、時代とともに移りかわり、とみに広がりをもってきている組合員の書籍購入を、その現実からスタートしてどう総合的に把握し、その蓄積・継承をつうじて如何に政策活動にまで発展させることができるかどうかは、店づくり、売場・棚づくりにとって決定的に重要なテーマとなっている。この課題がやっかいなことは、それが〝今日的な〟というモチーフをつねにともなうことであろう。表1は八二年十月の学生生活実態調査の際の「関心ある著者」の全国データーである。書籍購入に際して著者やテーマに関心をもっている学生は、全体の四五・二％であった。記名された著者の数は総計六八二名、そのうち複数の学生が一致してあげ

表1　関心のある著者（全国計）

順位	著者名	票	順位	著者名	票	順位	著者名	票
1	筒井康隆	85	33	柴田翔	15	65	ニーチェ	9
2	司馬遼太郎	78	34	栗本薫	14	〃	柳田国男	〃
3	森村誠一	47	〃	小田実	〃	67	村上春樹	8
4	本多勝一	42	〃	新田次郎	〃	〃	ゲーテ	〃
5	渡辺淳一	37	〃	村松友視	〃	〃	フォーサイス	〃
〃	大江健三郎	〃	38	田辺聖子	13	〃	横溝正史	〃
7	赤川次郎	36	〃	山本周五郎	〃	71	西村京太郎	7
8	開高健	35	〃	マルクス	〃	〃	加藤周一	〃
9	井上靖	31	41	福永武彦	12	〃	O・ヘンリー	〃
〃	松本清張	〃	〃	沢木耕太郎	〃	〃	江本孟紀	〃
〃	遠藤周作	〃	43	半村良	11	〃	J・P・サルトル	〃
12	平井和正	29	〃	ヘルマン・ヘッセ	〃	〃	陳舜臣	〃
13	五木寛之	28	〃	片岡義男	〃	〃	灰谷健次郎	〃
〃	夏目漱石	〃	〃	落合信彦	〃	78	有吉佐和子	6
15	三浦綾子	27	〃	A・C・クラーク	〃	〃	小林秀雄	〃
〃	太宰治	〃	〃	庄司薫	〃	〃	森有正	〃
17	星新一	26	〃	曽野綾子	〃	〃	芥川龍之介	〃
18	アガサ・クリスティ	25	〃	畑正憲	〃	〃	小室直樹	〃
〃	ドストエフスキー	〃	51	梅原猛	10	〃	豊田有恒	〃
〃	高橋和巳	〃	〃	エラリー・クィーン	〃	〃	高橋三千綱	〃
21	椎名誠	24	〃	鈴木健二	〃	〃	フロイト	〃
〃	井上ひさし	〃	〃	トルストイ	〃	〃	眉村卓	〃
23	安部公房	22	〃	高千穂遙	〃	〃	山岡荘八	〃
24	小松左京	20	56	吉行淳之介	9	88	和久峻三	5
〃	城山三郎	〃	〃	辻邦生	〃	〃	向田邦子	〃
26	つかこうへい	19	〃	三田誠広	〃	〃	栗本慎一郎	〃
27	石川達三	17	〃	渡部昇一	〃	〃	落合恵子	〃
〃	三島由紀夫	〃	〃	大藪春彦	〃	〃	岸田秀	〃
〃	吉川英治	〃	〃	カミュ	〃	〃	小林信彦	〃
30	北杜夫	16	〃	サリンジャー	〃	〃	カフカ	〃
〃	竹村健一	〃	〃	堺屋太一	〃	〃	S・スワフ・レム	〃
〃	丸谷才一	〃	〃	立原正秋	〃	〃	佐藤愛子	〃

（以下略）

た著者は二七〇名にすぎず実に四一二名の著者は一票のみであった。それまでの同主旨の調査と較べて〝建て前型〟の回答がようやく姿を消して本音が表面化したように思う。たとえば高校の教科書で扱われ従来調査では必ず上位にいた夏目漱石・芥川龍之介・太宰治・森鷗外が大きく後退し、現代作家・文庫本を始めとする出版点数の多い作家、雑誌・TV等でよく登場する作家・著者、国内外を問わずSF系の作家が数多く登場している。同時に山口昌男・加藤周一・栗本慎一郎・岸田秀・芦部信嘉・柄谷行人・別役実氏等が中位に顔をみせているのが注目された（調査時点が一昨年であることを考慮いただきたい）。表2は、都内の有力会員生協の売上げ（八三年十一月）の各ベスト二〇である。大学生協らしいロングセラーが好位置を占めているのと同時に、時代の息吹への敏感な反応もみとれる。たとえば十一月中旬から各紙誌が「年間ベスト3」「この一年を振り返って」の特集を行ったことの反映や、「モンキーハウスへようこそ」のように若者向けの雑誌が十一月中に一斉に書評でとりあげたことがいち早く反映している（十二月はベスト一〇入り）。昨年度を振り返ってみて印象深く思うことのひとつに、浅田彰『構造と力』中沢新一『チベットのモーツアルト』吉本・栗本『相対幻論』京極純一『日本の政治』淵一博『認知科学への招待』山田和夫『成熟と拒否』等のように大学生協から売れ始めている書籍が目立ってきているように思うことがある。記号論、ポスト構造主義、演劇・遊「戯」、新しい「コミュニケート文化」への関心、自分（私）への関心、人間・精神発達、障害児教育、中世史、分子生物学、情報・ハイテック・新素材、エコロジー・核問題等への関心の高さや、反応のスピードに「知」の最前線への関心の鋭さを手応えとして感じている。学生の書籍購入は、①学門・研究・授業のための書籍購入、②生活文化の向上をめざす〝情報〟取得のための書籍購入、③自己実現（読書）のための書籍購入に類型化されるが、それぞれの領域が個別化されているのではなく、それが一個の人格（生活者）として――自らが自らの生活の主人公であろうとする意志・方向感覚のもとで――総合化されている。諸々の調査や現実の売れ行き状況・企画テーマへの反応等をみていると、学生の書籍購入は自らの生活の重点をどこにおいているのかという基軸との関連でおこなわれていることが見てと

表2　売り上げベスト20

文庫ベストセラー

順位	書　　名
1	1973年のピンボール
2	かぼちゃの馬車
3	蝿の王
4	インポケット　11月号
5	風の歌を聴け
6	不思議の国ニッポン　Vol. 8
7	殿さまの日
8	1984年
9	菊と刀
10	ゲッコの提督
11	1980年アイコ16歳
12	エレンディラ
13	いきの構造
14	ザ・ベスト・オブ・P・K・ディック 2
15	グリーンレクイエム
16	雑学おもしろ百科（8巻）
17	ザ・ベスト・オブ・P・K・ディック 1
18	数学ふしぎ・ふしぎ
19	ロンドン旅の雑学ノート
20	流氷への旅（上）

新書ベストセラー

順位	書　　名
1	タテ社会の人間関係
2	派　閥
3	ヨーロッパ歳時記
4	モーツアルトを聴く
5	日本的自我
6	私の読書
7	戦略的思考とは何か
8	文化人類学への招待
9	「ＦＥＮ」を聴く
10	近代日本の民間学
11	日本の巨大企業
12	教育とは何かを問いつづけて
13	性格分析
14	玉手箱と打出の小槌
15	社会科学の方法
16	都市ヨコハマをつくる
17	イギリス人と日本人
18	社会科学における人間
19	フロイスの日本覚書
20	朝鮮語のすすめ

人文書ベストセラー

順位	書　　名
1	模索する大国日本
2	朝日キーワード '84
3	認知科学への招待
4	エントロピーの法則　2
5	「甘え」の構造
6	構造と力
7	意識革命のすすめ
8	中世の罪と罰
9	宇宙からの帰還
10	偏見の構造
11	ザ・ワールド　84
12	大学生の心理
13	仏教を読む3　一切は空
14	貧困なる精神　第15集
15	第5世代コンピュータ
16	教育亡国
17	光芒の1920年
18	気くばりのすすめ
19	記号の解体学
20	批判への意志

法経書ベストセラー

順位	書　　名
1	司法試験シリーズ　商法
2	日本の政治
3	模範六法　59年版
4	サントリー宣伝部
5	司法試験シリーズ　憲法
6	ポケット六法　59年版
7	司法試験シリーズ　刑法
8	憲法訴訟
9	新・日本経済事情
10	司法試験シリーズ　民法
11	コンパクト六法　59年版
12	世界経済動態論
13	行政法（下巻）
14	自民党政調会
15	ワークブック　民法（新版）
16	経済白書
17	商法の争点　第2版
18	犯罪白書（58）
19	ケインズと現代
20	デンジャラス　カレンツ

文芸書ベストセラー

順位	書　　名
1	見栄講座
2	相対幻論
3	・・・・・・絶句　下巻
4	・・・・・・絶句　上巻
5	'84年版　間違いだらけの車選び
6	筒井康隆全集　第8巻
7	新しい人よ眼ざめよ
8	カンガルー日和
9	K　G　B
10	筒井康隆全集　第7巻
11	優しいサヨクのための嬉遊曲
12	俺たちはノイズだ
13	23分間の奇跡
14	中国行きのスロウボート
15	糸井重里の仕事
16	新潮日本文学アルバム 第2巻 夏目漱石
17	ベルリッツの世界諜百科
18	モンキー・ハウスへようこそ
19	図解　愛車族のドライブ秘ポイント
20	写楽殺人事件

れる。この間品揃えの問題や棚づくり、平台づくりを考える際や、「読書推しん活動」を考える際（具体的には書評誌・読書誌の編集の際等）に、私たちはジャンルや分野や本自体にこだわりを持ちすぎて、生活のなかで書籍購入をとらえるとか、読者を生きた人間としてとらえるという視点をおろそかにしてきたのではないかと自省している。一冊の「本」をつうじて、あるいは売場をつうじて、「情報提供」をつうじて読者に働らきかける際に問題なのは、本と読者（人間）、本と生活の関り、大学でいうと教員と学生のつながり、学生同士のつながり、話題のなかに本を位置づけるという視点を大切にすることが必要である。

活字離れ世代、共通一次世代が本を読まない等という論議が不毛なままおこなわれていること自体が若ものを彼岸においやっているように思える。大学入学までの〃目的強制〃時代を経て、複雑で困難な現代社会への接点を、さまざまな情報の氾濫のなかで、自らの成長をそれなりに堅実にものにしようとする長男・長女世代（実に大学生の六五％を占める）がもはや〃時代〃を構成している。史上空前の多媒体状況のなかで育ってきた現代学生は社会的な諸装置（端末）のもとで記号能力を磨き、独自の姿勢制御と方位の識別をもっているように私にも思われる。

「テレビ映像は、活字にかわり得たか」と問われれば、それは明解にノーであると答えることがふさわしい。今日の社会的な文化状況のもとでの学生生活の広がりのなかで、今なお活字は正当な位置を保持しているとみることが正しいと思う。一昨年の反核運動の盛りあがりのなかで各地の大学生協で大江健三郎氏の講演会がもたれたが、いずこも教室・会場にあふれる参会者がみられた。

昨年の一〇月の大学祭では浅田彰氏の講演会がやはり盛会であったと報告されている。生活保守主義がどっしりと定着しているかの如く映る社会状況のもとで、若者たちのなかに真の「普遍主義的個人主義」(真の「国際化」)の確立を期待する声が高まっている。こうした若い世代の知的状況のあらたな変化をとらえるとき、しっかりとした時代観をもって読者と接することが大切になっているのではないだろうか。こうした努力は大学自体としても始められている。徳島大・大阪教育大・茨城大(教育学部)では、学生の意識を正確にとらえようとするアンケート活動やカリキュラムの見直しと関わって、読書をめぐってのシンポジュームが開催されている。大学生協連でも八二年の十月に「教員理事シンポジューム〃大学生協の書籍事業・読書推進活動〃」を開催した。全国から一三大学の教員理事が参加して二日間にわたってさまざまな角度から問題の所在をめぐって討論が行なわれた(資料もふくめてこれらの討論をまとめた小冊子は発刊以来三刷で二万部近く運用されている)。

その折の焦点も〃現代的な読書〃の仕方を大学での教育(授業)体系や、生協の〃場〃をとおして広く教員・学生の共通の課題として深めなければならないということであった。

※こうした視点は『大学はバベルの塔か』(隅谷三喜夫・東京大学出版会)、年末の朝日新聞「転換期の出版文化」等によって随分励まされている。

大学生協における書籍事業経営の問題点

この間順調に伸長をみせてきた大学生協の書籍の売り上げもご多分にもれず低成長期に入ってきている。八二年度に二七〇億円に達した売上げ高も今年度に入って全国平均で三%台の伸び率で推移している。全般的には客数が伸びていて、客単価・冊単価の停滞が特徴となっている(因みに大学生協の客単価は一六〇〇円前後である)。こうしたことの背景に学生の生活費・収入の伸びの鈍化が深く関係している。八二年度、八三年度の下宿生の収入の伸びは夫々四・九%、三・七%である。

支出面でも住居費(部屋代)、交通費・日常生活費等の伸びが著しく、そのことによって食事費、教養費とともに書籍代が圧迫されている。書籍代は八一年度を境に低

下を示している。教科書の購入などが四・五月集中型から九月くらいまでかかって購入されるといったことが顕在化してきたのと軌をいつにしている。このように学生の経済生活の状態が書籍購入に色こく影響を与えてきている。また一方で昨年度の調査では書籍代を三分位でみるとあまり買わない、読まないという第一・第二分位層で購入が大幅に減退し、もっとも良く買う層ではむしろ前年比一四%強も書籍代が増加していることがわかった（こうした二極化現象はあらゆる生活局面にわたってみられることも現代学生生活の特質のひとつである）。こうしたなかで生協での書籍購入率は全般的に着実に向上している。一昨年の調査では教科書・専門書の実際の購入（四～九月）の際の生協購入率は全国平均でも七〇%をこえていることがわかっている。こうした環境・到達度のなかで専門書の供給活動をいっそう活性化させるには、①大学の学科、ゼミのカリキュラム、研究動向の把握とそれに適合した品揃えの強化、②新刊・客注品・専門雑誌の動向を深く把握する、分析する力と仕入力の結合、③適確な情報提供力の向上（売場・案内・対話をつうじて）、④品揃えカードや一言カードによる組合員の参加の促進、⑤担当者の力量向上・蓄積の強化といったような店舗力の強化とともに、眼を大きくキャンパス全体に広げ、教員・研究者と学生のつながりのなかに生協らしい専門書の供給促進（プロモーション）を方法論化することをつうじて底辺を広げる等の活動を活発に行うようによびかけている。こうした活動は本来大学生協ならではの活動であり、生協の総合力をいかに効果的に発揮するかが問われている活動であると思っている。今日若手の研究者層（院生・助手）からは専門書の価格が高いということが鋭く提起されている。この方々の生活の厳しさを想うと切実な問題である。一方多くの組合員からは店舗内の体制の強化が要望されている。大学生協の書籍事業経営にとって〝割引〟をしていることは他書店と比べて人員体制、つまり店舗内組織の弱さに直結している。一〇〇坪店舗でみると人員は一般書店の丁度半分である。大学生協の書籍店舗の坪当り在庫は全国平均で一〇〇万円とこれも一般書店を大きく上廻っている。今日こうした問題点が書籍店舗をとりまいている。書籍事業経営も正面から腰を据えてとりかかる必要があるとの認識が漸く会員生協のトップの所に強まってきている。

組合員の実際の書籍購入からスタートし、こうした事業経営をめぐる問題点を直視し、いっそう組合員の〝生活〟と〝要求〟と〝参加〟を根幹にすえ、大学生協としての特質をいかした取り組みを本格的に強める方向で、マネジメント力を向上させることが共通のテーマとなっている。

大学生協連としての事業強化の方向

読者推進活動の本格化という課題がある。大学生協はこの間さまざまな形で読書推進や読書環境整備・書籍流通の改善策にとりくんできた。書評誌紙や読書誌の刊行、読書会や講演会の開催、教員著作リストの作成、教員や先輩の推せん書フェア、テーマ別の企画フェアの実施、分類パラダイム変換へのとりくみ、とともに連合会の場でも「読書のいずみ」の年三回の刊行とブックフェアの開催や教員理事シンポジウム「大学生活の書籍事業・読書推進活動」等を開催し問題の所在の洗い直し、意味づけをさぐる等の活動にとりくんできた。今日読書誌・書評誌を刊行している会員生協は五〇会員にのぼって

表3「読書のいずみ」テーマ

通巻 号 発行年・月	「読書のいずみ」対談タイトル	対談者
No. 13 '81年10月	—同時代のアイデンティティー— 核・軍縮，エコロジー	大江健三郎 VS. 安江良介（「世界」編集長）
No. 14 '82年4月	—知のアイデンティティー— 極大の世界と極微の世界	佐藤文隆（京大教授，物理学） VS. 九後太一（京大助教授，物理学）
No. 15 '82年10月	自己実現のアイデンティティー“学”への途と自己形成—	日高敏隆（京大教授，動物行動学） VS. 福井勝義（国立民族学博物館，文化人類学）
No. 16 '83年3月	—知のアイデンティティー— 歴史と空間の中の“人間”	網野善彦（神奈川大短期大学教授，歴史学） VS. 川田順造（東外大・AA研助教授，文化人類学）
No. 17月 '83年6月	—同時代のアイデンティティー— 核・軍縮，エコロジー—人は何に対して敏感になるか—	本多勝一（朝日新聞・記者） VS. 中村梧郎（フォト・ジャーナリスト）
No. 18 '83年10月	—知のアイデンティティー— 分子生物学・バイオテクノロジーと人間存在	飯野徹雄（東大教授，分子生物学） VS. 餌取章男（日経サイエンス編集長，科学ジャーナリスト）

いる。「読書のいずみ」では、同時代のアイデンティティをテーマに春には新入生への「知」の最前線の課題とテーマ別の書籍の紹介をすすめてきた。

この間とりあげてきたテーマは表3のごくと蓄積されてきている。識者の対談と類書の紹介をしているパンフレットは毎回各一〇万部前後学内で配布されている。

またこの間注文別によるカタログフェアについても、全集フェア、児童書フェア、洋雑誌フェアと開発してきた。いづれも多くの組合員にとっては日頃、手に入りづらくなっているとの声に応じた企画として開発され大変な好評を博している。また昨年末には岩波書店、未来社、東大出版会の各社のご理解を得て「復刊本」の注文制度をスタートさせた。これもある院生の要望がとりくみの出発点であった。限られた期間であり、人文書に限定された企画でもあったが、六九〇通の葉書き注文が寄せられた。注文数をみこんで二〇〇冊に達したものから買取りが約束であったが出された六〇点のうち一〇点前後は「復刊」にこぎつけられそうな到達度にある。

読書環境の整備、読書推進活動はこのように流通における組織的な能力の発揮といった概念もふくめて大学生協の社会的役割であると考えている。とくに今日のような時代状況のもとで、大学生時代に本や読書と広く関わる生活をいっそう活発に！と呼びかけることや、その条件を整備することを絶ゆまずに努力することは社会的にも大変大切な仕事であると考えている。

今年度も各地の会員生協でそれぞれにふさわしく読書推進活動が活発に行なわれると思うが、連合会でも「経験交流会」を開催する企画がたてられている。さらに「復刊」事業の発展や、専門書の出版情報の提供等のソフト面での開発でも大学生協らしい努力をつうじて何とか愁眉を開いてみたいと考えている。

大学生協は①基本方向、枠ぐみの一致を基礎にしているが、②圧倒的多くの会員が中・小規模の生協であり、③事業分野が書籍・購買・食堂・サービス・共済保険といった多分野に広がっており、それぞれに効果的な事業発展をはからねばならず、④しかも会員が全国各県にまたがっているという特質を持っていることから、会員生協の発展にとっては連合会を始めとする連帯活動の発展が不可欠に結びついている。たとえば教員養成系の大学の店舗は地域のなかではほぼ孤立した店舗であるが、教

員採用等めぐる諸問題を始め、売場・棚づくり、情報提供、読書推進等のテーマをふさわしく独自化するのには共通の悩みや課題がある。社会福祉、水産・畜産等の単科大学の学部・学科等にも同様なことが言える。

こうした立場から連帯活動を正しく発展させるのも連合会としての大事な事業である。

昨年は会員生協の合意のもとに取次政策の一部変更をおこなった。今日の学生組合員の書籍購入の現状や出版・書籍流通の状況を踏まえると「総合取次」と「専門取次」のくみたてのなかで、大学生協としての役割発揮に向けて専門能力を組織化していくうえでのひとつのステップ・アップが必要と判断しすすめたわけである。今年度も取次機能との結びつきをさらに前進させるために積極的な提案と討議をすすめたいと考えている。連帯活動の中軸は大学生協事業推進機構・書籍部長会（責任者小塚京都大生協専務理事）においている。部長会のメンバーは各ブロックの地域連帯活動の促進の仕事を併せて受けもって貰っている。今年最初の部長会でメンバーの皆さんにお願いしたことは、連帯活動の中心があくまでも商品であること、生きた現実の、現場の〝商品〟研究を活発に行うこと、をとくにお願いした。

部長会としてはこの一年間は、店舗マネジメントの強化、とくに仕入力の強化と人材育成の重視とそのための仕事の具体化が検討事項となっている。

昭和六〇年代への仕事の開始でもある。

ルルドへの旅・祈り
アレクシー・カレル／中村弓子訳　一六〇〇円
最高の知性の人カレル（ノーベル生理・医学賞）に一大衝撃を与えた聖地ルルドでの奇跡的な快癒の神秘！大科学者のたどった内的葛藤のドラマと精神世界の輝きは、病み、惑う現代人に真の光明をもたらす。

カレル―この未知なる人
アンチエ／中條　忍訳　二〇〇〇円
臓器移植の開拓者で「人間、この未知なるもの」を書き残した巨人カレル、科学と宗教の二元性に悩む複雑な内面の遍歴ぶりを見事に描き、その思想の全容を示す名著。

イエスのドラマ
ピーター・ミルワード／別宮・山中訳
対話で辿るイエスの生涯 1300円

新刊――
歴史のイエスを語る
八木誠一／秋月龍珉 2000円

春秋社
101東京千代田区外神田2-18-6
☎255-9611 振替東京8-24861

わが生協書籍部について

慶応義塾大学大学院
経済学研究科　井上弘基

「専門書」が売行き不振だという。一見してそこには様々な事情が絡み合っていることがうかがわれる。実は売行き不振ばかりでなく単に、読者としても、日頃出版社や著者にこそ言いたいことが多くある。しかしここでは書籍購入について日頃なじみ深い大学生協について、単に「専門書」の普及振興といったことではなく、かくあって欲しいという個人的要望を思いのままに綴てみることとする（とはいえ話は私の所属する大学の生協のことに限られる）。

店頭の品揃えに関して極端にいえば「偏り」が欲しい。大学生協連合会パンフレット『大学生協書籍事業の役割』（一九八三年）によれば、書籍部は1教科書類、2専門書、の他に3「多面的な関心に応じ」得る品、を揃えようとしていることが判る。それも必要であろうがすぐに気づくのは三者併記（特に3番）の総花性である。むろん品揃え充実の度合いはほぼこの順序どおりになっているようで、一般書店に比せば面積の割に「専門書」も充実している。しかし雑誌等の勢いは「専門書」を圧迫しつつあるようで、三田生協でも昨年店内配置替えが行われ、雑誌等のスペースはかなり拡大された。実のところ私は結構それをエンジョイしているがそこには次のような理由もある。

研究などに必要な書籍は往々にして店頭にないため、店内を見ずに初めから「注文」を出し、店内では雑誌や新刊書を立読みする次第である。雑誌・新刊書が貧弱になれば店内はつまらなくなるようであるが、たとえば新刊書といっても「専門書」は現在でも充実しておらず、それが大いに入いってくれれば別種の刺激的な楽しさも湧こうというものではないか？　総売上げなどはそれによって多少落ちるかも知れないが生協が一般書店と同じ論理（「ヨリ多くのお客様のために」等と表現される）で動く必要はないのではないか。また「店頭で見て」買う機会が多い学部学生（先のパンフレットから）に対しては生協の店頭政策は買われる本の種類についてかなりの方向づけを与えることができよう。趣味や流行ものの雑誌の多くは一般書店でいくらでも手に入いるので、私としては便利になる度合いから言っても、値引きの有難さから言っても「専門書」への一層の「偏り」を要望したい。

一口に「専門書」と言ってもいろいろあるが、ここでは全集・著作集などの形をとっているものは除いて考えた。それらの配架こそ貧弱であるが、スペースの関係から仕方のないことであろう。単行本の「専門書」（和書）が削られたりすれば意味がない。だが必要不可欠な教科書類を別として、雑誌はもとより入門・概説書の類はもっと整理できるのではないだろうか。「知識の偏り」などに配慮しようとしているのであれば、それこそ各種の「専門書」を揃える方が、概説書などの横断的完備よりはるかに望ましいことと思うのだが。現状では当校関係者の書いた本や、そうでなくとも教科書・参考書として指定された「専門書」・概説書はかなり揃っているが、それ以外の「専門書」となると怪しくなってくる。「専門書」を独断で決めるとして、すぐに思い浮かぶものでもたとえば、井上晴丸・宇佐美誠次郎『危機における日本資本主義の構造』（岩波書店）、竹前栄治『戦後労働改革』（東大出版会）、小林賢斉『再生産論の基本問題』（有斐閣）やその他、滝村隆一『唯物史観と国家理論』（三一書房）、三浦つとむ『大衆組織の理論』（勁草書房）、三戸公『官僚制』（未来社）等々は生協になかった筈である。また「国債」に関する概説書は結構あるのに、中島将隆『日本の国債管理政策』（東洋経済新報社）はなかったりするのである。

今まで述べたことの他に、本が売れた後長い間穴があいたままにしておかないとか、現在以上に各種案内活動を強化するとか、期待できそうなことはまだあるが、生協とて財政事情その他都合もあろう。あえてもう一点指摘すれば現在は外販関係などで優秀なサービス提供が行われているが、それを恒久的に可能とするようなシステム作り（教育と分業の両面から）は進められているのだろうか――利用者として若干不安を抱かざるを得ない。

いずれにせよ生協は一般書店と異なったポリシーを一定範囲内で持ち得る機関でありそれを生かして欲しい。つまり一般書店に任せ得るようなものは思い切って任せ、今まで以上に「専門書」の充実に努めて欲しい。

昨秋九州に三泊四日の研修旅行

人文会は昨秋十月五日から八日まで三泊四日で九州へ研修旅行を実施しました。参加人員は会員社の二十一人に東京から全行程にご同行いただいた東販本社書籍部長の児島役員、日販本社支店課の岡本課長を加えて総勢二十三人。熊本を振り出しに福岡、小倉、大分の各地を回り、書店、取次店さんとの意見交換を重ね、最後に国東半島の石仏の素朴さに束の間心を癒し、再びきびしい現実の待つ東京へ。

四日間で十五書店と東販・日販の九州、北九の各支店を訪問し、その間、研修会を持つという超過密スケジュールだったため常に時間不足の慌しさで、折角「歓迎人文会御一行様」と迎えて下さった書店、取次店さんに大変ご迷惑をかけてしまいました。紙上を借りてお詫び致します。反面、会員社一同それぞれの収穫を持ち帰った筈。今後の出版、販売活動にご期待下さい。有難うございました。

（鈴木記）

わが生協書籍部について

早稲田大学
法学部　岩東完治

一、生協の書籍店の品揃えは、一般書店のそれとは異って然るべきである。生協は学生の出資の上に成り立っているのであり、学校の施設内にある関係上、利用者も学生が大部分なので（あまつさえ、会員証の呈示を求められるので、一般の人はたとえ定価を払えば売ってもらえるにしても、購入には勇気を要するであろう）、学生のニーズにあった品揃えが必要となる。そこで、学生のニーズとは何か、というと、まず、講義で使う教科書・参考書がある。また、講義に直接使う訳ではないが、自分の学部の専門との関係で興味のある専門書、公務員試験・各種国家試験・マスコミ関係などの受験に必要な本、ひろく就職情報の収集に欠かせない本もある。もちろん、一般書店でよく売れるような、ベストセラー本、有名（もしくは若者に人気のある）作家の著書、話題になっている本等を生協で買えるにこしたことはない。万年金欠病の学生にとって文庫本の充実は不可欠だし、雑誌が一割引きで買えるのもありがたい。しかしながら、店舗のスペースに限界がある以上、これらの何から何まで店舗に並べるのは困難である。そこで、自ら、優先順位が必要となる。その場合のメルクマールとしては、一般書店で手に入れ易いか否かによるべきであろう。そこで、まず、教科書類が最優先するのは当然である。専門

書だから一般書店では手に入れにくいし、学生が必ず買う物だから、である。各種国家試験の受験に必要な本も読者層が限定されてしまうために同様である。問題となるのは、教科書でもなければ、各種国家試験等の受験参考書でもないような類の専門書である。これはなかなか生協の担当者の方としても店舗に並べにくいであろう。いくら大学の生協とはいえ、そのような専門書はあまり売れないだろうから（とくに大学生があまり勉強しなくなったといわれている昨今においては）。しかしながら、そのような本もやはり置いて欲しいと思う。並べてあるのを手に取って見ているうちに読む気も起きようというものだし、注文すれば取り寄せてくれるとはいえ、すぐ買えるにこしたことはない（第一、値段が分からない。一度、刑事訴訟法の本を取り寄せてもらったら、三千八百円もした。二千円程度だろうと思っていたために、たじろいでしまったが、わざわざ取り寄せてもらった以上、断るのもはばかられてそのまま買ってしまったことがあった）。確かに売れない本より売れる本を置くのが、企業経営の原則であろうが、そこは生協の独自性を発揮して欲しいところである。

二、話を早大生協書籍部へ移すと、私個人としては充分満足している。コーププラザが完成して、昔とは比較にならない程、売り場面積が拡大した。そのためか、品揃えにも余裕があるようだ。教科書はたいがい揃う（ただし、春先と学年末試験期に入荷が集中するので、この期をのがすと手に入れにくいこともあるが）。また、各種試験の受験参考書類もよく取り揃えられており、新刊もすぐ入るので、よく利用させてもらっている。季節によっても、品揃えに工夫がこらされていると思う。各種の試験時期に合わせて、その準備のための参考書がたくさん並ぶし、秋には、文庫本の割引セールもあった。また、よく各出版社のフェアも行われる。これは、日頃から欲しかった本が、多少安く買えるので大変ありがたく思っている（もっとも、安さにつられて、結局、読まない本まで買ってしまうという弊害もあるが）。なお、私は法学部だが、他学部の友人も、欲しい本はたいがい揃うと言っていた。専門書以外では、新刊書はすぐ入るようだ。しかし、新刊以外は多少偏りがあるように思う。スペースの関係上、仕方ないのであろうか。

〈人文書講座Ⅳ〉

園芸術から森林学まで

―「緑の危機」を考える―

有斐閣　平川幸雄

1　園芸家のこころ

カレル・チャペックという人がいた。『人造人間』などを書いたチェコの作家であるが、旅行記にもすぐれたものがある。一九二四年の『イギリス便り』は、ユーモアにあふれた軽妙な筆致で書かれており、ジャーナリスト・チャペックの力量がにじみ出ている作品であろう。

二十数年前、安保闘争のさなか、私たちのイギリス人教師が、この『イギリス便り』をテキストにして講読を進めたが、毎回がじつに面白かったことを覚えている。以来、チャペックという名前を心に銘記したが、かれに『園芸家12カ月』（小松太郎訳、中公文庫）という佳品があることを知って、その多彩な才能に感激したものである。

カレル・チャペックは一八九〇年、東ボヘミアの小さい町に生まれた。父は鉱山医、兄はヨゼフといって画家・詩人。プラハ大学で哲学を学んだ。第一次大戦後、ジャーナリストとなった。劇作家としても成功し、演出をやり、童話を書いた。マサリック大統領と親交を結んで談話録を出版し、旅行記を書いた。趣味も多方面にわたり、写真や絵はもちろん、犬を飼い、昆虫採集をやり、ついに園芸マニアになった。一九三八年ナチスのプラハ

進駐の少し前、四十八歳で若死した。兄のヨゼフは、一九四五年、強制収容所で死亡した。

三、四年前、チェコのカレル大学の女子学生が三人、私をたずねてきたことがある。チェコではアメリカの社会科学の本がなかなか手に入らず困っていること、そのために日本語を勉強して日本の社会学の本を読んでいることなどを話してくれた。談たまたまチャペックに及ぶと、「彼はチェコが誇る国民的作家です。ハシェイクとともに」という答えが返ってきて、私を喜ばせた。

例の『園芸家12カ月』という本は、一九二九年頃、つまり世界大恐慌のころ、全世界の人が不安と不景気につきおとされた頃に書かれたものである。一九一八年のチェコ独立後の社会も労資闘争で騒然となり、人心がトゲトゲしくなっていた時に、のんびりした園芸家の話を書いたチャペックの勇気に敬意を表したい。こんな名文句がちりばめられている。

——庭をつくるにはいろいろな方法がある。いちばんいいのは本職の園芸家にたのむことだ。

——素人園芸家になるには、ある程度、人間が成熟していないとだめだ。言いかえると、ある程度、おやじらしい年配にならないとだめだ。

——ほんとうの園芸は牧歌的な、世捨人のやることだ、などと想像する者がいたら、とんでもないまちがいだ。やむにやまれぬ一つの情熱だ。

——待てばバラの花咲く季節もある。

——われわれ園芸家は未来に生きているのだ。バラが咲くと、来年はもっときれいに咲くだろうと考える。十年たったら、この小さな唐桧が一本の木になるだろう、と。早くこの十年がたってくれたら！　五十年後にはこのシラカバがどんなになるか、見たい。本物、いちばん肝心のものは、わたしたちの未来にある。新しい年を迎えるごとに高さとうつくしさがましていく。ありがたいことに、わたしたちはまた一年、齢をとる。

園芸に仮託して、チャペックは、過酷な時代にヒューマニズムの夢をかたり、未来の社会像を思い描いているかのようだ。これが私には、たまらない魅力となっている。

さいきん、横浜に住む牧師さんの太田愛人氏の『**大地のカレンダー**』（大月書店、一九八三年十月）という本

が出た。都市の中にも自然や季節が、食物や花を通して感じられると説き、「都市の中の農耕」を固守したいと信念を語る。そして、狭くても庭があるならば、土を掘って野菜を栽培してみようと呼びかける。本のカバーの絵に、十五世紀フランスのランブール兄弟の絵『ベリー公のいとも豪華なる時禱書』の一枚（三月）が使われており、少しでも中世末期のヨーロッパ文化を知る者には親しみを感じさせる。文章は平易平明で、詩趣をたたえている。こんなところがある。

——誰が時を教えてくれるか、といえば、カッコウの初鳴きが豆播きの合図になるのです。五月十七日に毎年カッコウが森で鳴いたものです。……三月から私は百五十坪の畑の農夫になるのです。

私はこの本をざっと読んでみて、宗教と自然の関係を知りたいという好奇心にかられた。空の鳥、野の花、畑の緑といった自然的自然だけでなく、人間的自然をも含みこんだキリスト教的自然観を教示願いたいと思った。次の光の叙述は目に見えるようだ。

——六国峠の見晴台に立つと、西方の相模湾が真上の太陽に映えて金色に輝いていました。……光る海と山頂の私の間に近くの低い山々が重なるようにして前景をつくっていました。手前の山は緑、次は青、次は白、と光の海に近づくにつれて色が渋く変り、海に到達すると光にのまれてしまいます。海の青さすら白に変りはてていました。冬の光の魔術とも言えましょう。

私は京都の冬の西山を歩いていて、これと同じような体験をしたことがある。十二月末の夕方五時、小倉山の山頂から眺めた京都の街は、夕日に映えて金色に輝いていた。その金色の街も束の間、落日とともに真暗になった。この色の急激な変化に、私は自然の不思議とともに一種の宗教美をも感じたのであった。

2　なぜエコロジーか

エコロジーとか**エコロジー運動**ということばを近ごろよく耳にする。また「環境科学」という学問分野もできているらしい。学者と市民の協力をうたい、市民に広く扉を開く「**日本環境学会**」という新しい学会が、一九八三年に設立・発足している。

エコロジー（ecology）ということばは新しいことばではない。ギリシア語のオイコス（家）とロゴス（学）とを結びつけた造語であるが、一般に「生態学」と訳されている。動物や植物（生物）と環境との相互関係を研究する生物学の一分野を「生態学」と名づけたのは、十九世紀末のドイツの進化論者**ヘッケル**であると言われている。また「人間生態学」ということばを最初に用いたのは、**J・W・ビューズ**であった。

しかし、動植物でなく、人間を主役にすえた、人間の共同的生活における生態系の研究、人間と環境との相互関係の研究、すなわち人間生態学（human ecology）を創始したのは、シカゴ学派の都市社会学者、**パーク**、**バージェス**、**マッケンジー**である。人間生態学とは「人間が環境の選択的・分布的・適応的諸力によって影響される空間的・時間的な関係の研究」（マッケンジー）であると定義される。

二十世紀初めのアメリカは、急激な工業化・都市化に伴う社会変動の時期であり、とくに大都市ではさまざまな社会病理現象が噴出していた。人間生態学はこれらの社会病理現象を科学的に分析し、その解決策を提示しようとする政策的意図があった。

人間生態学を創始したパークによれば、競争を基礎的な過程とするコミュニティと、コミュニケーションを基礎的な過程とするソサエティとを区分し、人間生態学は前者すなわちコミュニティを研究の中心にすえるものであるとした。こうした文脈から、有名な同心円地帯理論、都市社会の犯罪や非行、家族崩壊、売春、アル中、精神障害、ゲットーやスラムなどについての数々の研究が生み出された。

この初期の人間生態学にみられるコミュニティとソサエティの二分法は今では誤りであると批判されているが、都市構造についての数々の知見は今日でも有効性を失っていない。

ところで今日、エコロジーが脚光を浴びているのは、人間生態学との関連においてではなく、人間の自然破壊による人間自身の生存の危機という問題からである。人間を含めた生物と環境の相互関係、すなわちエコシステム（生態系）の破壊が人類の存続を脅かすところまできていると認識されるようになったからである。

われわれの工業文明は絶え間ない大量生産と市場拡大

を追求してきた。そのため公害の深刻化、緑地破壊、海・河川の汚濁がわれわれの生命を襲っている。大気汚染、工場騒音、交通騒音、振動が住民生活を著しくおびやかしている。さらに国土の乱開発や大規模公共事業開発は人間生活を破壊するばかりか、自然のサイクル・リサイクルをも狂わせているといわれるようになった。こうした中から生まれたエコロジー運動は、生物学の一分科としての域をこえて自然や居住環境保護、人間生存のための社会運動となってきている。現在、多くの自然・社会科学者が人間と生態系の関係に赤信号が現われていると警告しているのである。もしも人口の増加、工業化、公害、食糧生産、資源の枯渇がこのまま続けば、地球における成長の限界は一〇〇年以内に必ず現われるとまで言われているのである。

3　森林の人間学

日本の照葉樹林が絶滅に瀕している、という新聞記事をみたのは、たしか去年の初夏のことであった。神山恵三氏の近著『**森の不思議**』（岩波新書、一九八三年九月）をみると、わが国の極相、つまり自然環境とつりあって安定した状態であるカシやシイなどの照葉樹林は、全森林面積の〇・〇六％という惨めな状態になってしまったという。

かつて西日本の鎮守の森は、常緑・広葉の照葉樹林におおわれていたはずである。森は私たちに材木や食糧を供給したばかりでなく、神秘的で宗教的な「気」を与えつづけてきた。古い神社はうっそうたる森につつまれ、林の中のこんもりとした樹叢には祠がまつられていた。日本人にとって森は「聖なる」地であった。森は、神霊を迎えるにふさわしい地域であると考えられていた。森は神の霊が時と必要に応じて降臨するところとみられていたから、そこに社殿が設けられ、森は神域を示すところであった。神祠をまつらない森は、いわば負の聖域とみなされて、忌むべき、恐るべき、不吉な山、タタリのある森と言い伝えられ、村人に恐れられた。

一方、ヨーロッパにおいても、森と湿地はゲルマンの郷土の特徴であった。森は木材・食糧の供給地となったばかりか、ヤギやブタを森の中で飼育した。童話・民話・伝説において森林は村や町と対立する神秘的な別世界であった。子どもや旅人が森の中へ迷いこんでいくと、そこ

に見知らぬ家が立っていて、魔法使い、鬼婆、小人などの住まいだったりする。森はやはり、俗界と区別される聖なる地であり、恐ろしいところだったにちがいない。

神山さんの『森の不思議』によると、森林についての関心が高まっているという。一つは、森林そのものに対する危機感からであり、二つは、生活様式の急速な都市化によって人間の自然とのつきあいが減少し、心身の健康に影響を及ぼすようになってきたからだという。そこで神山さんは、心身にとって欠くべからざる自然環境、とりわけ森林が危機におとし入れられ、また緑から疎外された都市空間に住まざるをえない現代人に、森林の空気に全身をひたしたいという「森林浴」への欲求が生まれると説く。「森の不思議」の不思議は、神秘的・宗教的・民俗的な意味のそれではなく、もっぱら「森の中の馥郁(ふくいく)とした香り」のもつ神経的・生理的作用をさして用いられている。その正体はどうやら「フィトンチッド」(植物が出す殺菌物質)らしいのである。

「若い頃から森林の魅力にひかれて各地を訪れ、森と人間とのかかわりを探ってきたわたしが、自らの足跡をほぼ時の流れにそってふりかえりながら、緑のはたらきを考えようとするものである」という本書は、著者の森とのつきあいを体験記風に書いていて、私には樺太の「オタスの杜」の話がいちばん印象的であった。

森林のすがすがしい環境から受けられる「山の幸」も、森の中に入ってさわやかな気分になればそれで充分であると、私には思われた。一時間でも二時間でもいい、都会人は今、「すがすがしさ」を求めていることは間違いないだろう。しかし、個人に還元された健康、自分自身だけの健康だけで、現代の都市型社会を生きられるだろうか。人間関係における「すがすがしさ」はどうしたらつくれるだろうか、私は、そんなことを考えながら、この本を読んだ。

そしてさらに、タイトルの「森の不思議」から私に連想させるイメージは、森のもっている社会・文化的な聖性のことであった。人間の文明の高度化がこの聖性をどのようにして侵蝕したか。それは人間にとって不幸なことではなかったか、という疑問がわいてきた。自然と人為の対決を、森をテーマにして語ってほしかった。

地球規模で拡がる森林の危機に人類はどう対処すべきであろうか。心身の健康問題だけに還元することなく、

人類社会の「生存」の問題として、考えていくべきではないだろうか。

参考文献

〈本文に直接関係するもの〉

○カレル・チャペック、小松太郎訳『園芸家12カ月』中公文庫
○太田愛人『大地のカレンダー』大月書店
○神山恵三『森の不思議』岩波新書
○レーチェル・カールソン『沈黙の春』新潮文庫
○H・D・ソーロー、神吉三郎訳『森の生活』岩波文庫
（他、訳書多数）
○R・E・パーク、E・W・バージェス、R・D・マッケンジー、大道・倉田訳『都市』鹿島出版会
○勝沼晴雄・鈴木継美『人類生態学ノート』東京大学出版会
○『今西錦司全集』1〜10、講談社
○吉良竜夫『生態学からみた自然』河出書房新社
○宮脇昭『植物と人間』NHKブックス
○梅棹忠夫『文明の生態史観』中央公論社
○高木仁三郎『わが内なるエコロジー』農山漁村文化協会
○宮本憲一『日本の環境問題』有斐閣
○M・ブラウン『荒れる大地』筑摩書房
○半谷高久『環境の危機』I・II、鹿島出版会
○福島要一『自然の保護』時事通信社
○J・G・フラー『死の夏』アンヴィエル
○J・リッジウェイ『環境を破壊したのは誰か』潮出版
○宮脇昭『緑の証言』東京書籍
○室田武『エネルギーとエントロピーの経済学』東洋経済新報社
○玉野井芳郎『エコノミーとエコロジー』みすず書房
○D・ディクソン『オールタナティブ・テクノロジー』時事通信社
○遠藤マリヤ『ブロックを超える——西ドイツの緑の党』亜紀書房
○『季刊リサイクル文化』星雲社
○S・クロール『エコロジー』現代書館
○樋口忠彦『日本の景観——ふるさとの原型』春秋社
○東京大学公開講座『人間と環境』東京大学出版会

○湊秀雄『地球人の環境』東京大学出版会
○吉川公雄『人間生態学』東海大学出版会
○金子厚男『西日本・自然誌』未来社
○西日本新聞社論『ふるさととは何か』未来社

〈森の生態、森の文化〉

○及川和男『森が動く時』上・下、新日本出版社
○J・S・コリス、福本剛一郎『森——自然と人間』玉川大学出版部
○大島襄二『森と海の文化』地人書房
○小林伴史・小林典子『森のクラフトマン』JICC出版局
○市川光雄『森の狩猟氏』人文書院
○筒井迪夫『森の巡礼』地球社
○只木良也『森の生態』共立出版
○四手井綱英『森の生態学』講談社ブルーバックス
○C・M・ターンブル、藤川玄人訳『森の民』筑摩書房
○只木良也『森の文化史』講談社現代新書
○山本学治『森のめぐみ』筑摩書房
○S・マルシャーク、湯浅芳子訳『森は生きている』岩波書店
○『森の猟人ピグミー』（世界ノンフィクション）筑摩書房
○北村昌美『森林と文化—シュヴァルツヴァルトの四季』東洋経済新報社
○四手井綱英『森林の価値』共立出版
○鈴木秀夫『森林の思考、砂漠の思考』NHKブックス
○依田恭二『森林の生態学』築地書館
○ドヴェーズ、猪俣礼二訳『森林の歴史』文庫クセジュ、白水社
○西口親雄『森林への招待』八坂書房
○四手井綱英『森林保護学』朝倉書店
○高橋理喜雄『緑の作戦』大月書店
○神山恵三『健康の設計』大月書店
○F・モウワット『オオカミよ、なげくな』紀伊国屋書店
○G・マウントフォート『野生動物を救う——絶滅の渕から』紀伊国屋書店
○E・リンデン『チンパンジーは語る』紀伊国屋書店
○杉山執『ボッソウ村の人とチンパンジー——西アフリ

カ　地の生態』紀伊国屋書店
○米村晃多郎『どろ亀さんの森林哲学』春秋社
○大政正隆『森に学ぶ』東京大学出版会
○朝日稔編『滅びゆく動物たち』東海大学出版会
○ヴェレシチャーギン『マンモスはなぜ絶滅したか』東海大学出版会

〈生態学、植物社会学〉
○E・P・オダム、水野寿彦訳『生態学』築地書館
○『生態学』（自然読本）河出書房新社
○沼田真『生態学読本』東洋経済新報社
○K・E・F・ワット、伊藤嘉昭訳『生態学と資源管理』上・下、築地書館
○D・F・オーデン、市村俊英訳『生態学とは何か』岩波書店
○梅棹忠夫・吉良竜夫『生態学入門』講談社学術文庫
○奥野良之助『生態学入門』創元社
○E・P・オダム、三島次郎訳『生態学の基礎』培風館
○I・クラフチェンコ、益子正教訳『生態学の社会＝哲学的研究』合同出版
○吉良竜夫『生態学の窓から』河出書房新社
○V・G・デティアー、桐谷圭治訳『生態系と人間』岩波書店
○湯嶋・桐谷・金沢『生態系と農業』岩波書店
○四手井綱英『生態系の保護と管理Ⅰ　森林』生態学講座、共立出版
○佐々木好之編『植物社会学』共立出版
○沼田真『植物たちの生』岩波新書
○山下正男『植物と哲学』中公新書
○斎藤正二『植物と日本文化』八坂書房
○H・G・ベーカー、阪本・福田訳『植物と文明』東京大学出版会
○門奈仁之ほか『都市文明とリサイクル』リサイクル文化社
○島津康男『環境アセスセメント』NHKブックス
○山村恒年『環境アセスセメント』有斐閣
○森下郁子『環境を診断する』中公新書
○K・リードほか、宮脇昭ほか訳『環境生態の百科』小学館
○佐々学ほか編『環境科学大事典』講談社

○小泉明『環境と健康』大修館
○宝月欣二ほか『環境の科学』NHK市民大学双書
○P・B・シアーズ、柳田為正訳『エコロジー入門』講談社現代新書
○C・A・アドラー、奥谷喬司訳『エコロジーの幻想』佑学社
○坂本藤良『エコロミックス』マネジメント社
○中野尊正ほか『都市生態学』生態学講座、共立出版
○吉村元男『都市に生きる方途を』NHKブックス
○品田穣『都市の自然史』中公新書
○中西悟堂『定本　野鳥記』春秋社

〈エコロジー、エコロジー運動〉

○J・ベンソール、都留信也訳『エコロジー』上・下、共立出版
○E・リウス、斎藤・山崎訳『エコロジー』晶文社
○D・シモネ、辻由美訳『エコロジー――人間の回復をめざして』文庫クセジュ、白水社
○宮川中民『エコロジー運動は何をめざすか』現代の理論社
○J・P・リブ、辻由美訳『エコロジストの実験と夢』みすず書房
○J・L・サックス、山川・高橋訳『環境の保護』岩波書店
○福岡正信『自然農法　わら一本の革命』春秋社
○福岡正信『自然農法入門』春秋社
○中村尚司『地域と共同体』春秋社
○新井米子『マタギ食伝』春秋社
○柴田徳衛・松田雄孝『公害から環境問題へ』東海大学出版会
○品田穣『ヒトと緑の空間』東海大学出版会
○沼田真『環境教育論』東海大学出版会

誠信書房
東京都文京区大塚3－20－6

フロイトの読み方
外林大作著　著者の読み方は、従来の批判的立場とは異なり、フロイトが本当は何を考え、何を言わんとしていたのかを、空想・神話、衝動、抑圧、無意識を中心に読み進められる。　一八〇〇円

死の声
E・S・シュナイドマン／白井徳満・白井幸子訳
遺書、刑死者の手記、末期癌患者との対話から、人間の心の驚くべき事実を明らかにし、いつかは訪れる「死」の意味とこれからの生き方を示唆す。　二〇〇〇円

◎グラフィック・ベンチャー◎

マルクス インロンドン
ちょうど100年前の物語
A・ブリックス　大内秀明・監修　小林健人・訳
マルクスの65年の生涯のうち34年を過ごしたロンドン——。本書はマルクスの伝記に絡め、当時のロンドンの様子と、亡命者たちや歴史を生きた人々の姿を生き生きと描く。　A5判・1600円

日本古代文化の探究（全16冊）
最終回配本　**戦**（いくさ）
大林太良編　本書は、戦の一般論について、民族学、考古学、文献史学からアプローチした論文を、事例研究として、日本史家による白村江の、壬申の乱、広嗣の乱を取上げた。　四六判・1800円

社会思想社　東京都文京区本郷1-25-21　電話 東京 03-813-8105

東京神田　**筑摩書房**　小川町2

初めて成る現代語訳全集！

弘法大師 空海全集
●全八巻

弘法大師空海全集編輯委員会編　＊読下し文と現代語訳を対照した斬新な内容　＊空海研究の第一線に立つ最高執筆陣を結集　＊各巻千項目を越す語注と平明な解説を収録　＊A5判上製・平均650頁　●内容見本呈

好評発売中
①思想篇一　秘密曼荼羅十住心論　6400円
②思想篇二　即身成仏義　吽字義他　6000円
（特別定価5800円　59年3月21日まで）

カナダ遊妓楼に降る雪は
工藤美代子　明治末期のカナダで暮した日本人娼婦たちの、歴史の闇にとざされた生と死を掘起こす書下しノンフィクション。1200円

こんな家に住みたいナ
《絵本にみる住宅と都市》　延藤安弘　家づくり、町づくりの知恵を世界の絵本の中に探る、新しい住文化のすすめ。　1800円

●好評発売中
クリストファー・ロビンの本屋
C・ミルン　小田島若子訳　2300円
子どもの本屋、全力投球！
増田喜昭〈就職しないで生きるには❾〉1200円
読書三昧
篠田一士〈犀の本〉　980円
現代演劇まるかじり——芝居小屋の18人
森秀男　1800円

晶文社　東京都千代田区外神田2-1-12　電話255-4501

日本の思想の水脈を普遍的な場へ！

講座 日本思想 全5巻

編集 相良亨／尾藤正英／秋山虔

〔本講座の特色〕
○〝日本的なるもの〟を問う
○独自な構成、ユニークな編集
○学際的な共同研究
○豊富な話題、多彩な「月報」
A5判／平均三六〇頁／上製函入
定価各二四〇〇円　内容見本呈

□巻別構成
1 自然……発売中
2 知性……発売中
3 秩序……12月刊
4 時間……84年1月刊
5 美……84年2月刊

東京大学出版会
113 文京区本郷東大構内 ☎03-811-8814

古地図抄 日本の地図の歩み

室賀信夫 著　定価3000円

日本の地図は、古代から中世にかけての行基図や天竺図、荘園図に始まる。明治以前の古地図の歩みを文化史的視点から解説。（増刷出来）

ウェブスター辞書の思想

ロリンズ 著　瀧田佳子 訳
本間長世 解説　定価2800円

アメリカ語辞典を最初に編さんしたウェブスターの名は、辞書の代名詞ともなって世界中で親しまれている。アメリカの独立と共に成長し、建国に情熱を注ぎ、最終的には自已の思想に基づいた辞書の完成に至る多彩な生涯を描いた本格的伝記である。

スペイン 歴史と文化（新装版）

H・カメン 著　丹羽光男 訳　定価3800円

一般の人々やスペインへ旅行される方がたが世界史の中で重要な役割を果した国を理解できる。300枚以上の写真・挿図。

東海大学出版会
東京都新宿区新宿3-27-4　電話(03)356-1541

日本評論社

統帥権

大江志乃夫 著
〔日評選書〕
定価1800円

かつての日本の軍隊は、天皇の下に統帥権が独立し、国民が関与出来ないまま戦争への道をたどった。いま、自衛隊にその危険はないかを探る。

講座・日本技術の社会史〔全8巻〕 建築

網野善彦・永原慶二 他編
第7巻〔第4回配本〕
定価2900円

古代から明治まで日本の建築技術の変遷・発展の姿と職人集団の役割を社会との関連で捉える。

東京都新宿区須賀町14・☎03－341－6161

現代社会科学叢書
既刊42冊／目録呈

ヘルベルト・グルール 収奪された地球

辻村誠三、辻村 透訳

「経済成長」の恐るべき決算

西独〈緑の党〉創設の指針となった問題の書。世界史への深い洞察と現状に対する緻密な分析に支えられた全人類への警告と提言！　定価二、二〇〇〇円

青年の異議申し立て

ケニストン 著　高田・草津訳　1100

余暇文明へ向かって

デュマズディエ 著　中島・巌訳　1300

過剰化社会

ブーアスティン 著　後藤和彦訳　2000

東京創元社

中国五千年 上・下

陳舜臣

装画＝平山郁夫／写真＝陳立人
●定価各1,400円

歴史とはこんなにおもしろいものか。六時間で読める中国史入門書決定版。

手軽に中国史を読みたい、という人のための書下し。神話時代から現代に至る五千年の興亡のドラマが展開する。

陳舜臣中国の歴史 全15巻 定価各1,600円 揃価24,000円

◆構想10年、遂に完成した7,000枚の書下し巨編。

平凡社 東京都千代田区三番町5 〒102／振替・東京8-29639

死と歴史 西欧中世から現代へ
アリエス『〈子供〉の誕生』の著者が、禁忌のテーマ〈死を前にしての人間の態度〉の変遷を描く。伊藤・成瀬 訳 三000円

われらの生涯のなかの中国 六十年の回顧
伊藤武雄・岡崎嘉平太・松本重治 中国現代史に深くかかわった三氏が60年に及ぶ中国での体験と秘話を語る。 三100円

躁うつ病と対人行動
クラウス 躁うつ病とはどういう病気であろうか。まじめ、誠実といわれる病前性格等問題性に迫る。岡本進訳 四五10円

精神病理学研究 井村恒郎著作集 I
戦後まもなくの「矛盾の病態意識」から「心理療法」「分裂病家族」に至る予見の眼力と十全な吟味を経た11篇。四000円

東京文京本郷3丁目17-15 **みすず書房**

反対党の研究

G・ヨネスク、I・デ・マダリアーガ著 宮沢健訳
【制度としてのその過去と現在】本書は、反対党（オポジション）の真の役割・使命を理解するために好適な各国の制度史的・比較政治学的研究。四六判上製・価一八〇〇円

弁証法と科学

R・ブプナー著 加藤尚武・伊坂青司・竹田純郎訳
哲学的思考の自立を保持しつつ、ポパー、クーン、ファイヤアーベントの科学論の系譜とヘーゲル、マルクスの弁証法の系譜を解釈学的手法で摂取。四六判上製・価一八〇〇円

東京・文京 小石川3-7 **未来社** 電話・代表 (814) 5521

法政大学出版局

岩手をつくる人々
〈古代—近世篇／全三巻〉

森嘉兵衛 坂上田村麻呂の時代から戊辰戦争まで、苛酷な風土に生き独自の国振りを築いた岩手一千年の人物誌。〈近代篇〉とあわせ全六巻完結！ 上中下全三巻／定価各1800円

既刊〈近代篇〉上中下全三巻／定価各1200円

昔話の語り手

野村純一編 各地の研究者が総力を結集して昔話伝承者の人間像とその社会的背景を追求し、語り手の成立条件を実地に探りつつ昔話研究の課題と展望を浮彫にする。定価2000円

医とからだの文化誌

中川米造 古今東西の風俗の世界を渉猟し、病気と医療にまつわる古人の試行錯誤の過程に人間観・文明観の変遷をたどりつつ、広範な視野から医の原点を問い直す。定価1800円

東京都港区南麻布2-8-4／振替・東京6-95814

●日本文化の基層形成の解明に光を当てる

シルクロードの文化と日本

長澤和俊著　四六判　1600円〒250円

ステップ路、オアシス路、南海路三つの道を経て日本に伝えられた、西域・中国の文化と日本文化とのかかわりを、包括的に考究する。

千代田区富士見2-6-9　振替東京3-1685

雄山閣出版

古代史解明の清新・多彩な成果。すべて書き下しの力作！

古代史研究選書

第1回配本

聖徳太子信仰の成立　田中嗣人著　定価二五〇〇円

蘇我氏と大和王権　加藤謙吉著　定価一七〇〇円

刊行開始　12月10日

日本古代国家の成立と息長氏　大橋信弥著（59年2月刊）

記紀神話の成立　三宅和朗著（59年2月刊）

律令国家の軍事制　野田嶺志著（59年4月刊）

▼以後隔月に刊行の予定
▼四六判／三〇〇頁前後

吉川弘文館　東京都文京区本郷7-2-8

有斐閣（ゆうひかく）　東京神田神保町2☎264・1311

大学生の心理

関峠一・返田健編　《有斐閣選書》1400円

受験戦争から解放された今、キャンパスの中に、現代の大学生の多様な意識と行動をさぐる。

ことばを心理する

山田純著　《有斐閣選書》1400円

心で感じることを表現する道具としての言葉のあり方を検討し、言語学習の問題にも触れる。

加茂利男著

アメリカ二都物語

—21世紀への旅

46判　定価一六〇〇円

衰退のなかに再生があり、再生の裏側に危機をはらむ、疲弊しながらも底深い活力を秘めたニューヨークに、21世紀への都市のゆくえを探るハード・トラベル・エッセイ。

青柳清孝著

アメリカの黒人家族

46判　定価二四〇〇円

アメリカ的人種主義と急速な近代化のなかで、黒人家族はどのようにしてその生命力を維持し、文化を伝達してきたか——10年間におよぶ地方調査の貴重な研究成果。

東京神田　青木書店　神保町1

非売品

昭和59年3月30日発行　年4回発行　第40号
発行所　人文会　みすず書房内
〒113 東京都文京区本郷5—32—21
（113—91 東京都文京区 本郷局私書函89号）

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印